

畜産みやぎ

発行所

仙台市宮城野区安養寺三丁目11番24号

法 宮城県畜産協会

電話 022-298-8473

編集発行人

木村春雄

印刷所

(株)東北プリント



干支「亥」

もくじ

CONTENTS

会長年頭挨拶	2	<畜試便り>	
知事年頭挨拶	3	「乳牛における乾乳期用配合飼料の利用法」.....	8・9
丸森町堆肥センターの紹介	4	優秀農林水産業者の表彰について	9
宮城県肉用牛改良意見交換会について	5	食育をテーマにちょっとおしゃれなお料理を!!	
始めよう簡易放牧		県内産豚肉及び牛肉を食材とした	
一簡易電気牧柵を活用した放牧の取組	6・7	調理体験教室盛会裡に終了	10・11
賀春		賀春	12
<衛生便り> アカバネ病について (2)	7		
～生後感染による起立不能～			

みやぎの
畜産情報
発信基地

宮城県畜産協会ホームページ

U R L <http://miyagi.lin.go.jp>

Eメール info@mygchiku.or.jp



古紙パルプ配合率100%の再生紙と、植物性大豆油インキを使用しています。

〈会長年頭挨拶〉



社団法人 宮城県畜産協会
会長 木村 春雄

新年明けましておめでとうございます。

皆様には、ご家族お揃いで新春をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

昨年は、戦後農政の転機となる経営所得安定対策等大綱の決定を踏まえた農政改革関連3法の成立、WTO農業交渉の凍結、各国とのFTA（自由貿易協定）・EPA（経済連携協定）をめぐるわが国の食料・農業・農村にとって将来に関わる極めて重要な交渉が行われた一年となりました。こうした中、今年は亥年とのこともあり、猪突猛進にならないよう再確認を行いながら次の課題に取り組んで参りたいと考えています。

まず、「担い手」の育成確保につきましては、新たな品目横断的政策の導入に伴い、地域の実態に即し、生産者、関係機関、関係団体皆様方のご協力を頂き一体となって取り組んで行きたいと考えております。更に、つくりあげた担い手への個別事業対応と経営指導の強化を図って参ります。一方、小規模・兼業農家、定年帰農者など多様な農業者への支援にも引き続き取り組んで参ります。

また、当面凍結とされたWTO農業交渉では、交渉再開は依然不透明ではありますが、官民一体となった取り組みや主張を共有するG10農業団体との連携強化を基本とし取り組む必要があります。

さて、本県の畜産は、農業産出額の3割を占めるまでに成長し畜産主産県としての位置を確保しておりますが、米政策の転換により畜産は益々重要な品目となっておりますが、畜産物の生産活動を通じ体験や交流を通じた豊かな人間性の育成と環境保全、高齢化や担い手不足に対応した生産基盤の強化、低コスト化生産への対応、環境への負荷軽減、食肉の安全・安心、家畜衛生対策等々緊急な課題が提起されております。

このような現状を踏まえ、本会は主に宮城県が打ち出す農業・農村振興や食

の安全、安心確保の実現に向けた畜産関連施策と連携を密にし一体的に事業を推進していかねばならないと考えております。

本県の畜産主産地として、より一層競争力を強化していくためには生産性の高い畜産経営体に対する支援指導、価格安定対策、家畜の改良等多岐にわたる事業に積極的に取り組み畜産経営の安定に資する所存ですので、関係機関、団体の皆様には今年も更なるご支援、ご指導を賜りたくお願い申し上げます。

最後に、畜産農家の皆様、関係者の皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げ年頭のご挨拶といたします。



〈知事年頭挨拶〉

県民とともに築きたい
「豊かでやすらぎの
ある宮城」

宮城県知事 村井嘉浩

明けましておめでとうございます。皆様には輝かしい希望に満ちた新年を健やかに迎えのことに喜び申し上げます。

昨年は、宮城県出身の荒川静香さんがトリノオリンピックで金メダルを獲得し、私たち県民に大きな夢と感動を与えてくれました。一方、10月の低気圧通過に伴う暴風雨では、サンマ漁船の海難事故で多くの尊い命が奪われたほか、住宅や公共施設、農林水産業などに大きな被害が発生しました。亡くなられた方々の御冥福を心からお祈りいたしますとともに、被災者の皆様に改めてお見舞い申し上げます。県といたしましても、被災施設の復旧や必要な支援を行うなど、県民生活の安定を図ってまいります。

さて、県政を取り巻く情勢が大きく変化する中で、すべての県民が希望を持って安心して生活できるみやぎを構築していくためには、しっかりとした経済基盤を築き、創出された富の循環によって、福祉や教育、環境、社会資本整備などの分野における取組を着実に進めていく必要があります。こうした考えの下、民の力を最大限に活かしながら、「富県みやぎの実現」「安心と活力に満ちた地域社会づくり」「人と自然が調和した美しく安全な県土づくり」の三つの柱を基本とした政策に取り組んでまいります。

まずは、10年後の県内総生産10兆円実現を、県民共有の目標として掲げ、県内産業の活性化を図り、本県経済の成長を促進していきたいと考えております。その原動力となる強い産業基盤をつくるため、産学官の連携や東北各県との協力などにより、自動車関連産業の誘致、競争力のある産業の育成・集積、

県内企業の海外経済活動の支援などに取り組んでまいります。また、より多くの観光客を誘致し、交流人口の拡大により県内の消費需要を高め、それを産業や経済の活力に変えていくことが重要であるとの認識から、観光を新機軸とした県土づくりを進めてまいります。

次に、すべての県民がどの地域でも安心して暮らせるみやぎを実現するため、救急医療体制の整備や居宅介護サービスの充実強化のほか、障害者の地域生活を支援する取組などを総合的に推進し、福祉サービス水準の更なる向上を図ってまいります。また、子どもを産み育てやすい環境を築くため、子育てや女性の就労に対する支援の充実を図るほか、子どもの能力や創造性を最大限に引き出す教育を進めてまいります。

さらに、深刻化する環境問題などを踏まえ、地球温暖化対策や廃棄物の再資源化などにより環境負荷の低減を図り、経済成長と環境保全が両立する社会の実現を目指してまいります。また、宮城県沖地震などの災害に備え、各種施設の整備や情報ネットワークの充実を図るほか、県民の皆様や地域コミュニティ、企業の方々などと連携し、官民を挙げて、災害に強い宮城県を構築してまいります。

さて、今年3月には、仙台空港アクセス鉄道の開業が予定されており、仙台空港の利便性向上が図られるほか、富県戦略の柱である観光振興や国際戦略を推進する上でも大きな強みになるものと期待しております。本県が東北地方の発展を牽引するという気概を持ちながら、他県との連携強化を図り、東北全体が一体となって、激変する時代の要請にこたえ、国際社会において先導的な役割を担うことができるよう広域的視点に立った県政を進めてまいります。

県民一人一人が「生まれてよかった、育ってよかった、住んでよかった」と思える宮城県を県民の皆様とともに築き上げてまいりたいと考えておりますので、皆様方の一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

年頭に当たり、皆様方の御健勝と御多幸をお祈り申し上げます。あいさつといたします。

丸森町堆肥センターの紹介

丸森町

丸森町は県内でも有数の酪農家数を有し、「ミルクの町丸森」と呼ばれるほど酪農が盛んな地域です。現在58戸の農家が酪農を営んでおり、平成17年度の農業総産出額48億円のうち酪農では約12億円と約25%の割合を占めています。

丸森町では各関係機関の指導・助言をいただきながら、平成15年度から5ヶ年計画で国の補助事業である「資源リサイクル畜産環境整備事業」を導入し、総事業費9億6千万円で酪農家が密集している4地区に堆肥センター等の建設を進めてまいりました。平成17年度までに3地区の整備が終了し、平成18・19年度では町内でも最も酪農が盛んな館矢間地区で堆肥センター等の整備計画をしています。

丸森町の堆肥センターの概要ですが、堆肥センターの管理運営については、受益農家が指定管理者として管理運営にあたっています。

まず各酪農家から排出された畜ふんを一次処理するために、堆肥乾燥施設に搬入します。堆肥乾燥施設のレーンの深さは30cmで天日乾燥が中心です。最初投入された畜ふんは約50日で搬出口まで運ばれます。このときの水分は83%から75%に落ちるように畜産農家は注意して、攪拌機を稼働させています。

水分が75%に落ちた畜ふんは、堆肥乾燥施設から堆肥センターに搬入し、15日間に1回タイヤローダーで攪拌し、150日間で約58%の完熟堆肥の製造を目指します。

各堆肥センターで生産された堆肥は、酪農家を中心に農地還元を実施しておりますが、堆肥づくりは、日々試行錯誤の連続でした。堆肥センター建設にあたり、優良事例地視察研修を幾度か実施し、堆肥づくりのノウハウを畜産農家は得たものと思っておりましたが、いざ一年を通し堆肥乾燥施設・堆肥センターを稼働してみると、最初の一年間堆肥センターは、畜ふん置き場のような状態でした。この状況は畜産農家が堆肥乾燥施設に畜ふんを投入すれば、必ず水分75%に落ちるものと思っていたことが原因でした。一年と通して、畜ふんを堆肥乾燥施設に投入しても75%の水分まで落ちる時期はあまりないことを実体験するまでに時間がかかったように思えます。

確かに堆肥乾燥施設は、気温が高い時期には乾燥能力は十分ですが、気温が低い時期または湿気が多い時期には、副資材（モミガラ）等を加えるなどしなければ、畜ふんは発酵する水分まで落ちないのです。

現在丸森町の多くの酪農家は、気温が低い時期・湿気が多い時期には多めに副資材を加え、さらに夏場に堆肥乾燥施設で処理した堆肥を戻し堆肥で利用するなど、工夫しながら堆肥センターで完熟堆肥づくりを実践しています。

また、農閑期等には副資材（モミガラ）等の収集に力をいれるなど、酪農家の意識は、堆肥センター設置前と比べるとかなり変化してきました。

丸森町では毎年畜産共進会「あぶくまの里・モーモーまつり」を開催しています。

その際、来場者に「完熟堆肥の無料配布サービス」を実施していますが、酪農家がつくった完熟堆肥は好評で、2tトラック分の完熟堆肥が午前中になくなるなど人気コーナーの1つとなってきています。

また平成18年度からは耕種農家（稲作農家）にも完熟堆肥を供給できるようになり、耕畜連携の環は徐々に広がってきており、平成19年の秋には完熟堆肥で育った「特別栽培米」として店頭に並ぶものと思われま

す。

(農政課 佐藤 徳和)

宮城県肉用牛改良意見交換会について

宮城県産業経済部畜産課

1 開催の経緯

宮城県の肉用牛飼養の状況は、飼養戸数の減少が進む一方で、担い手を中心に規模拡大が進み、飼養頭数はほぼ横ばいで推移しています。しかしながら、近年における肉用牛の改良についてみると、繁殖用雌牛の更新を県外、特に南九州等からの導入に頼るところが大きく、県内における優良牛の保留が進んでいない状況にあります。また、みやぎ総合家畜市場上場牛を見ても、県有種雄牛の比率が低下しており、種雄牛造成における課題も生じています。

これらのことから、今後の和牛改良方針や種雄牛生産システム等について、地域毎に現場からの声を集約する場を設け、和牛生産に対する県民の英知を結集するシステムを構築していく必要があります。その方法として、県で開催している肉用牛改良委員会の内容を周知するとともに、現場における意見を集約する場として各地域において、「宮城県肉用牛改良意見交換会in〇〇地域」を開催し、県の和牛改良方針の議論を深め、和牛の改良を推進していくこととしました。

2 開催の概要

今年度は、大崎管内（平成18年11月9日開催）、登米管内（11月10日開催）、栗原管内（12月20日開催）において開催しました。参加者全員が発言でき、それぞれの意見集約が図れる人数とするため、県の肉用牛改良委員会（大学、全農、畜産協会、畜試、畜産課）からと地域の生産者代表（和牛改良組合、肥育牛部会、農協、人工授精師、女性部、担い手等）からのメンバー合わせて約20名により意見交換を行いました。

なお、意見交換会は、一般に公開して開催しており、傍聴者も含めると、各会場約30～50名の参加により実施しました。来年度においては、大河原管内、仙台管内、石巻管内において開催する予定としております。

3 意見交換会での発言内容抜粋

意見交換会においては、はじめに宮城県の肉用牛生産の状況、肉用牛改良方針について説明を行った後に、それぞれの現場における問題等について意見交換を行いました。意見、要望については、各地域毎に様々でしたが、要約すると次のとおりです。

(1) 種雄牛造成について

- ・ 増体型、経済ベースで成り立つ種雄牛造成を要望する
- ・ おとなしい牛が欲しい（気高系はおとなしいうだ）
- ・ 事故（下痢、食い止まり等）のない牛が欲しい
- ・ 茂重波系統は本県で維持して欲しい
- ・ 食味、脂肪の質、小ザシ、サシのモモ抜け等、宮城県（茂重波系統）の良さを活かして欲しい
- ・ 種牛性、体型を改良できる種雄牛も欲しい

(2) 保留対策について

- ・ 育種組合においてもっと 保留対策を進めなければならない
- ・ 助成単価、頭数を上げて欲しい
- ・ 対象牛の 基準等を拡大して欲しい

(3) 飼養管理について

- ・ 飼養管理マニュアル、交配指導が欲しい
- ・ 母牛が 増体系となっているので、上場月齢を早める必要がある

(4) その他

- ・ このような意見交換会をもっと 早く開催すべき、また、継続して開催して欲しい
- ・ 食肉業界の意見を改良に取り入れてはどうか
- ・ トレーサの時代であるので、宮城生まれ宮城育ちにこだわりたい

4 今後の方向

県で実施できる検定頭数には限度があり、検定期間に長い年月がかかることから、全ての要望がすぐに実現できるわけではありません。

しかしながら、今回の意見交換会で得た貴重な発言については、宮城県肉用牛改良委員会において早急に検討し、今後の宮城県の種雄牛造成に反映していきたいと思っております。

今後も宮城県の肉用牛改良方針の下に、継続的に肉用牛改良を実施していくために、肉用牛生産農家の協力をいただきながら、関係者が一丸となって進めていくことが不可欠ですので、今後ともよろしくお願ひします。

(改良衛生班 鈴木 秀彦)



始めよう簡易放牧 —簡易電気牧柵を活用した放牧の取組—

宮城県産業経済部畜産課

放牧は、草資源を効率的に活用し、適度な運動をすることにより牛の健康づくりにも効果的な取組で、古くから牧野や草地を活用して広く行われてきました。

ここ数年は、「誰でも、手軽に出来る」ソーラー電気牧柵等を活用した簡易放牧が普及し始めています。

簡易放牧は、里山の荒廃の要因となる耕作放棄地対策としても期待され、全国各地で牛による「舌草刈り」として評価されています。

簡易放牧のメリット

- ①牛のエサ（草）確保（飼料自給率の向上）
- ②飼料給与やふん尿処理等の飼養管理作業の軽減
- ③どこでも、誰でも手軽に設置が出来、費用も安価（撤収も容易）
- ④耕作放棄地（遊休農地）の解消や景観保全等の農山村環境の改善

➡ 省力化とコスト化

< 遊休桑園 >



放牧前



放牧1ヶ月後

< 遊休水田 >



放牧前



放牧20日後

電気牧柵の設置作業は、支柱、主柱、電気牧柵線、電源の設置等です。設置作業は、地形や面積等にもよりますが、短時間で設置が出来ます。電気の流れを確認後、放牧しますが、放牧前には馴致が必要です。馴致は、電気牧柵を牛に覚えさせることと外の環境に馴らすことです。

放牧を行うための主な留意点

- 1 放牧を行う前の馴致
- 2 衛生対策の実施（ダニ駆除薬の塗布等）
- 3 水飲み場の設置
- 4 日々の牛や放牧地の観察



電源のソーラパネルとユニット



電気牧柵内の放牧牛

電気牧柵の整備には、各種の支援措置もあります。詳しくは、最寄りの家畜保健衛生所・畜産振興部までお問い合わせ願います。

簡易放牧に対する各種支援事業

事業名	事業内容	補助率
1 草地畜産生産性向上対策事業【ALIC】	農協・放牧集団等が持続型草地畜産を行うのに必要な施設等（電気牧柵等）への補助	2分の1以内
2 地域肉用牛振興対策事業【ALIC】	日本型放牧の推進に必要な電気牧柵等の整備に補助	2分の1以内
3 みやぎの簡易放牧普及促進事業【全農】	農協が簡易放牧の普及促進を図るため、実証展示の電気牧柵等の整備に助成	定額 200千円以内
4 強い農業づくり交付金(飼料増産の取組)	日本型放牧推進の取組に対し、必要な電気牧柵等の整備に補助	2分の1以内
5 中山間地域等直接支払交付金	中山間地域において、耕作放棄地の発生防止・復旧などの一定の要件を満たしているときに電気牧柵等の整備に支援することが可能	定額
6 耕畜連携推進対策(水田飼料作物生産振興事業)	水田における団地化の飼料生産、稲発酵粗飼料、水田放牧等の取組に補助(産地づくり交付金への上乗せ)	13千円/10a

※補助区分：表中の【ALIC】は、(独)農畜産業振興機構の畜産振興事業。
【全農】は、全農宮城県本部の助成事業。その他の事業は、国の交付金等。

(草地飼料班 石川 知浩)

〈衛生便り〉

アカバネ病について (2)
～生後感染による起立不能～

仙世家畜保健衛生所

前号でアカバネ病の典型例について述べられておりますが、今回は、アカバネ病の生後感染による起立不能等の多発例について紹介します。

昨年9月上旬から後肢の麻痺や起立不能を示す子牛や育成牛が、九州南部を中心に、乳用牛肉用牛を問わず認められました。その発生頭数は、熊本県だけでも107戸121頭に及びました(11月30日現在)。

検査の結果、発症牛の脳にウイルス感染特有の非化膿性脳炎が認められました。発症牛の脳や同居牛の血液からアカバネウイルスが分離され、解析の結果、いずれもアカバネウイルスの「イリキ株」に近縁であることが分かりました。

イリキ株は、1984年に鹿児島県で初めて分離され、蚊などの吸血昆虫を介して子牛に生後感染し、非化膿性脳脊髄炎を起こし、起立不能などの神経症状を示すことが報告されています。その後も数年に一度の頻度で散発していましたが、今回のような一時期

に多発した例は過去にありませんでした。アカバネ病のワクチン株とはやや抗原性が異なりますが、極端な相違ではなく、現行のワクチンでもある程度効果を示すと考えられています。

子牛や育成牛へのワクチン接種については、発生頻度や費用対効果を考慮すると得策とは言えず、従来通り、妊娠牛に対して適切にワクチン接種し、母牛の抗体保有率を高めることで、死産ととも子牛の神経症状の発生リスクをも低減できると考えられています。

今年度、宮城県におけるアカバネ病の流行は確認されていませんが、死産や新生子の体型異常、起立不能を示す牛が確認された場合は、かかりつけの獣医師または最寄りの家畜保健衛生所へご連絡ください。

(病性鑑定班 石橋 拓英)

〈畜試便り〉

「乳牛における乾乳期用配合飼料の利用法」

宮城県畜産試験場

ホルスタイン種乳牛における乾乳期の飼料給与は、ボディーコンディションの維持、分娩後の起立不能など周産期疾病の防除、初乳や血液中の免疫、泌乳初期乳量および繁殖成績に関連していることが指摘され、近年、重要視されてきています。NRC標準（2001）においても、分娩前3週間は移行期とされ、エネルギーやビタミンなどの要求量が強化されています。しかし、本県では乾乳牛の飼養管理に十分な注意を払われていない場合も多く、泌乳期用の配合飼料を給与しているケースも少なくありません。そこで、今回、新しい乾乳期用の配合飼料を利用し、分娩前後の血液成分の動態および初乳の免疫等を調査したのでご紹介します。

乾乳期用の配合飼料の栄養成分は、移行期の乾物摂取量の低下に加え、胎児の栄養や分娩後の泌乳に備えるため、現物でTDN75%、CP20%と一般の泌乳期用の配合飼料に比べて高く、一方、Caは0.3%と低カルシウム血症予防のため低く設計されています。また、体内に吸収しやすい有機ミネラルやビタミン含量も強化されています。

次に、乳牛の乾乳期から泌乳期にかけて行った給与試験の概要について説明します。供試牛はホルスタイン種乳牛10頭を用い、乾乳期用（T区）と泌乳期用（対照区）のそれぞれの配合飼料を給与した両区で比較しました。移行期（分娩前3週間）の給与飼料構成および栄養成分は、表1のとおりです。給与は日本飼養標準（1999年版）でTDNを100%に充足させ、分娩後はリード飼養を行いました。また、対照区では分娩予定日の2週前に、当試験場で慣行しているビタミンADE剤（ビタミンA,D,E濃度は順に50万、5万、50IU/ml）を個体体重に合わせて約6～8ml投与しました。

その結果、周産期の疾病は乳房炎がT区と対照区でそれぞれ2頭、胎盤停滞が対照区で1頭発生しました。血液成分の結果では、対照区に比べT区の方が分娩日の血漿Ca濃度は高くCa代謝が良好であったこと、また分娩日から分娩後4週までの遊離脂肪酸濃度は低く推移し、体脂肪の動員が少なかったこと等が考えられました（図1,2）。その他の成分（TP,Tcho,TG,GOT,GPT,Glu,P,Mg）についてはほぼ正常値内にあり、両区の間ほとんど差はありませんでした。血清中の免疫グロブリン濃度（IgG,IgA,IgM）は、両区の間有意な差はありませんでした。初乳中においても同様に有意な差はありませんでしたが、IgG濃度はT区（54mg/ml）の方が対照区（72mg/ml）に比べやや低くなりました。

今回の結果から、乾乳期用配合飼料の利用は免疫に対してビタミン投与と同等の効果が期待できること、低Ca血症のリスクがより減る可能性があること、給餌に係る労力も減ることなど良い点が見られました。また、泌乳初期ではエネルギー充足率が対照区に比べて高く、泌乳量や繁殖などにも好結果が期待できるので今後も調査を進めて行きたいと思います。

表2には移行期のNRC要求量を示しましたが、ポイントとして自給粗飼料の多給与時にはK含量（乾物で2%以内に抑える）に注意すること、ミネラルの陽陰イオンのバランス（負のバランスにする）、Mg含量（乾物で0.35～0.4%）やSe含量（0.3ppm）を適切にすること、ボディーコンディションを維持させること、乾物摂取量を充足させること、そして分娩時のストレスホルモンの上昇を抑えること等が周産期疾病を防ぐために重要です。

表1. 給与飼料の構成割合と栄養成分

	移行期 (DM%)	
	T 区	対照区
オーチャードラップサイレージ	67.1	67.7
トウモロコシサイレージ	5.7	5.6
アルファルファヘイキューブ	3.0	4.1
泌乳期用配合飼料 1)	-	13.4
トウモロコシ圧パン	-	8.5
乾乳期用配合飼料 2)	24.0	-
第2 磷酸カルシウム	-	0.4
炭酸カルシウム	0.2	0.3
TDN, %	64.7	63.0
CP, %	12.6	12.9
Ca, %	0.46	0.53
P, %	0.36	0.33
ビタミンA, 千IU/日	158	150
ビタミンD, 千IU/日	51	50
ビタミンE, 千IU/日	1.2	0.2

1) 成分率(現物%)はTDN70、粗蛋白16、粗脂肪4.3、Ca0.7、P0.3、Mg0.2
 2) 成分率(現物%)はTDN75、粗蛋白20、粗脂肪3.8、Ca0.3、P0.5、Mg0.3、
 ビタミンA, D, E含量は300, 200, 250IU/kg。

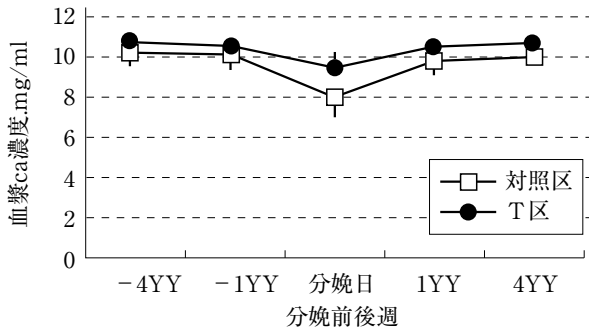


図1. 血漿Ca濃度の推移

表2. 移行期のNRC推奨値

	経産牛	初産牛
NEL, Mcal/kg	1.54-1.61	1.54-1.61
CP, %	12	13.5-15
NFC, %	36-43	36-43
NDF, %	25-33	25-33
Ca, %	0.45	0.4
P, %	0.3-0.4	0.3-0.4
Mg, %	0.35-0.4	0.35-0.4
Se, ppm	0.3	0.3
ビタミンA, 千IU/日	100	75
ビタミンD, 千IU/日	25	20
ビタミンE, 千IU/日	1.2	1.2

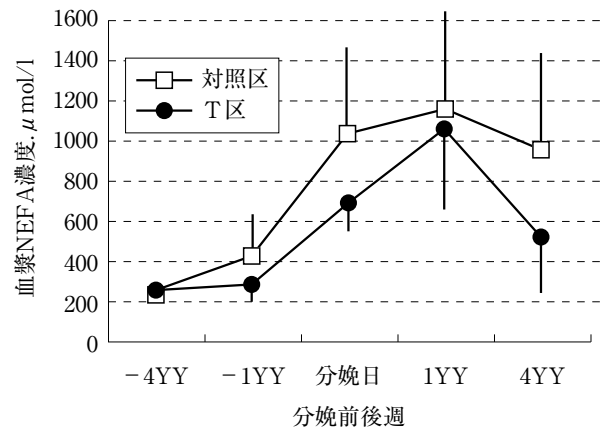


図2. 血漿遊離脂肪酸濃度の推移

(酪農肉牛部乳牛チーム 石黒 裕敏)

優秀農林水産業者の表彰について

平成18年11月23日(木)に明治神宮会館において平成18年度(第45回)農林水産祭表彰式典が開催されました。

式典では、財団法人日本農林漁業振興会の会長である松岡利勝農林水産大臣をはじめ各界の代表者、中央・地方の農林水産関係者等約800人が参加して天皇杯、内閣総理大臣賞及び日本農林漁業振興会会長賞の授賞式が行われました。

本県畜産関係では、次の方々が栄えある賞を受賞されました。心からお喜び申し上げますとともに、ますますの御発展をお祈りいたします。

宮城県産業経済部畜産課

表彰行事名	品目	市町村	受賞者
平成17年度 宮城県総合 畜産共進会	乳用牛 肉用牛 肉豚	丸森町 栗原市 登米市	半沢 善幸 栗原市築館和牛改良組合 (有)ピッグ夢ファーム
第45回仙台牛 枝肉共進会	肉用枝肉	大郷町	佐藤 喜一

(家畜改良衛生班 渡辺 弘)

食育をテーマにちょっとおしゃれなお料理を!! 県内産豚肉及び牛肉を食材とした調理体験教室盛会裡に終了

社団法人宮城県畜産協会

生産現場の姿、そして流通に乗り、食卓へ届くまでの講話と調理体験を通じ“食”の安全・安心を深めてもらうため、宮城県畜産ふれあい体験交流推進事業の一環として去る12月7日(木)に豚肉を食材とした体験教室を仙台市立南小泉小学校の保護者、社会学級の皆さんに参加をいただき、また、第2回目は12月16日(土)に牛肉を食材とした教室を大和町保育所の保護者の皆さんの参加の下、まほろばホールで開催致しました。

南小泉小学校での豚肉を食材とした教室には20才代から60才代までの皆さん約40名が参加されました。

初めに、生産者を代表し全国農業協同組合連合会宮城県本部畜産課長大友先生から主として豚肉生産について生産農場では色々な種類の豚が飼育されており、1kg前後で生まれた子豚は6ヶ月齢で体重110kg程度になり、肉豚として出荷されることなどが紹介されました。

流通については県食肉事業協同組合連合会長加藤先生から流通の現況と豚肉の部位についての講話をいただきました。



店頭で色々な銘柄が並んでいる精肉には純粋種の肉は少なく、大部分は二元なり三元交雑種の肉であることなど初耳の受講者もあり、豚肉について関心と興味をもたれたようです。調理体験に入る前に純粋種『しもふりレッド(デュロック種)』と三元交雑種の『宮城野豚』、『輸入豚肉』のバラ肉3点をフライパンで炒め、塩コショウで賞味していただきましたが、おいしい、まあまあ、おいしくなかったと様々な意見がありました



が、中でも、^{けものしゅう}獣臭がない“しもふりレッド”に人気集中しました。

調理体験については、明治乳業(株)管理栄養士夏井先生から豚肉の栄養バランスと調理に関わる一連の講話をいただき調理に着手、約1時間程掛かりましたがメニューの①豚肉のゴマみそ焼き②けんちん汁、その他のデザート等4品に挑戦し、成果品の試食に舌鼓を打ちました。初めて参加した方々が多く楽しかった、家庭のメニューに取り入れ、子供に食べさせたいと話されていました。

第2回目となった大和町保育所(まほろばホール)で開催した牛肉を食材とした教室には20才代~60才代の保護者や保育士の皆さん約30名が参加され、牛肉の生産現場の話と流通について、見聞を広げました。特に店頭で注意して欲しい事柄等について、全国の銘柄牛には松阪牛(三重県)、



近江牛（滋賀県）そして神戸牛（兵庫県）等々あり本県の仙台牛や山形県の米沢牛にしてもトレーサビリティ制度の導入により、どこで生まれどこで育ったかがわかる個体識別番号がついていること（輸入牛肉にはついていない）ことを知り、また、しもふり（サシ）の状態は脂肪が赤肉部分に入る状態により等級もつけられ程よく入ることでもまさは決まることを聞き納得した様子でした。

調理実習に入る前に、『仙台牛』、『国産牛肉（F1）』及び『輸入牛肉』の3点の肩ロースをフライパンで炒め、塩コショウで賞味していただきましたが、おいしい、まあまあ、おいしくないなど意見は様々、食べる人の年齢による嗜好や脂肪の多少により好みに差があり、輸入牛肉をおいしいと評した方もおり、中には、脂肪が多い肉（しもふり肉）がおいしいと評する方、また、脂肪の少ない赤身がおいしいと評する方もおられ、嗜好に差があるようでした。

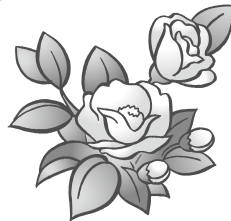
調理体験については、夏井先生から牛肉の栄養バランスと調理に係る講話を受け調理に着手、調理に約1時間半程掛かりましたが、メニューは①ビーフストロガノフ②キャロットマリネ風サラダ、その他デザート等4品の調理体験を終え、試食して頂きました。家庭でも作ってみたい等思いを込めた成果品に感激を新たにしていました。



30才代のお父さんも家で作って子供に食べさせたいと満ちた笑顔が印象的でした。

今回の調理体験教室開催に際し、全国農業協同組合連合会宮城県本部米穀部から宮城県産の新米をご提供、園芸部からはさまざまな県内産の新鮮野菜を、畜産部からは“宮城野豚”を、（農法）伊豆沼農産からは“しもふりレッド”（伊達の純粋赤豚・デュロック種）をそれぞれご提供いただきました。全ての食材は県内産を活用した加工調理体験教室は、数少なく両教室とも盛会裡に終了できました。ここに様々な食材をご提供頂きました皆様に感謝と御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

今後とも微力ではありますが生産現場の果している役割と食品の安全・安心に対する理解を得るための事業を展開しながら畜産物の消費拡大につなげていきたいと考えております。



(経営支援課)

NAR 地方競馬全国協会 岩手競馬（盛岡・水沢開催）3月 開催予定表

・上段 岩手競馬開催日 ・下段 場外発売開催日

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
3月	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	笠松		佐賀 佐賀	船橋 荒尾	船橋 船橋					佐賀 佐賀	大井 大井	荒尾 笠松					佐賀 佐賀	浦和 荒尾	高知 浦和											名古屋	

※開催期間中の重賞レース

- ・第52回ダイオライト記念（3月7日船橋）
- ・第10回黒船賞（3月21日高知）
- ・第14回マーチステークス（3月25日JRA中山）
- ・第30回名古屋大賞典（3月28日名古屋）

賀 春

宮城県農業協同組合中央会長	木村春雄
全国農業協同組合連合会宮城県本部長	松井俊幸
宮城県農業共済組合連合会長理事	浅野衛
みやぎの酪農農業協同組合代表理事組合長	砂金甚太郎
宮城県農業公社理事長	伊藤孝雄
宮城県草地協会会長	風間康静
宮城県獣医師協会会長	太田孝
宮城県酪農協会会長	砂金甚太郎
宮城県ホルスタイン協会会長	佐藤正志
全国和牛登録協会宮城県支部長	佐竹仁郎
宮城県牛乳協会会長	梅澤盛夫
宮城県家畜商協同組合理事長	三戸部栄一
宮城県養鶏協会会長	村上寛
宮城県ホルスタイン改良同志会長	半澤善幸
宮城県家畜人工授精師協会会長	大江義之
宮城県牛乳普及協会会長	砂金甚太郎
宮城県食肉消費対策協議会長	加藤善昭
宮城県畜産協会会長	木村春雄

〈人の動き〉

みやぎの酪農協同組合

(平成19年1月1日付)

新	旧	氏名
指導課長 仙南支所長	指導課長補佐 指導課長	飯塚 倫康 須藤 茂